無名小品

詩集かへり花

五百旗頭欣一

ナイニキビキホイ

序

私の心のなかの色々な
ものが あつまって
この短詩集が始めて
でき上りました
御高覽の程切に
おねがひ致します。

皇紀二千六百三年春
五百旗頭欣一

かへり花

かゝり花はゝさゝ
そっと蚊をよんで
たわんで
目をはぢく

かゝり花は白い
いくにちか流れに
顔をうつし
かれくさのうたをきく

かゝり花は淋しい
たれも知らないミみち
日がとゞかなくなる
暗くなる。

初冬

茄子殻に
鶏頭がもえのこり
薪の切口が
あたらしい光りをもつてゐる。

白い土蔵の多い
この村、
何かひゞくこゝちして
冬めく。

ぞうた 帶を
ぬくめながら
駅 賣の
そば が うまい

機関車のひゃきと
芒の光り

赤草の荷が
積まれて ゐる
日のくれだった。

あられ

あられが
あられが

またしても
桐の葉の上に
たまる

かびなれた
鳶が死んでゐた
あしたの

みんなよって來て
胸もものところをさはってゐる

ほゝをさすような
あられの中に。

冬日小景

白いく小徑
見たことのある赤い草の實

甲斐のやまなみ
別れし駅のちいさく吹かれ

枯はすに渡鳥が鳴き
こごえるたわむれ

かまきり雨相に死す
斧くみふせて。

軽井澤の春

天然氷をつくる
日影の外廷も
すっかり取りのけられ
作業場には誰もこない

大きな氷室は
かたく鎖され
暖かくなるにつれて
いよいよ土嚢を
つみ重ねられる

冬中いそがしい思ひを
眺めてきた枯芦も
新らしい芽を
冷たい汀にひたしてゐる

ひばりが澄んで
友と別れてきた音韻が
いつまでもほゝに

私のくつ跡が枯芦に滲んで
ふくれてくる。

梅の實

うめの實がころ落ちてゐた

淡黄色にやつれて

石だゝみの際の
酸將草の花の
露にぬれて

うめの實がここにも
一つ落ちてゐた

蟻地獄の凹んだところ
白くまみれて

梅の實が掌にあれば
やすらかに

うれひなく
ころがした。

秦

應接間があるといふ
この町には、めづらしい
かし家

たれもこない
くらがりに
栗をかめば
歯にしみる

ポケットを、おさえて
くゞりが
なかなか ぬけられない

白い雲が
日てり雨になってくる。

孟蘭盆

石たゝみが
きれいに洗はれてゐて
あい色の夕ぐれ

ひやい風が すーと
白い帷子に とほり ぬける

燈籠の灯を
ひきよせて
迎火を焚いた

いつか寺へ寄進した佛手柑が
良く育つて居るといふ

折掛どうろに火を移しながら
あの木は
この指の傷のことも よくしつて居る。

۱۹۵۹ء

よしの川に
手をつけて
みると

こひびとの
やうに
想ふてゐる

おめにかゝらぬ
おもゝちを
秋風が
また　來て

あたらしく
して
行つた。

FK

彼岸花

友がなくなった　おり
手向のやうに
居ならんでくれた
彼岸花
ぽき〳〵
折れば
紅が泣く。

旅愁

柾の葉が
はたくと
この村を
別れる

岩にそうた
こみちが
冷々として

衣までうるほふ

草鞋が
きれそうになる。

樂

けやきの巨木

眞空をひいて
新しい
生命にひらかれて行く

天壽のよろこびと共に
進水のしぶきをきとめて。

その樹脂のあふれは
工人の思ひくに
しっかりと

今から
強兵を運ぶ
夢を見て居るのだ。

確氷峠

列車のあかるみに
工夫が淋しい声で
なつかしむだ

顔とかほとが見えない作らも

小屋には
ひとり ふたり
酔ってゐるのも 居たやうだ

ランプの光りが
ちらつと小さく
ひくうなって行った。

白い合歓の花
しろい谷みず

トンネルの
したゝりが
また頬に
ふりかゝってくる

きうすこし登れば
冷たそうな
軽井澤の灯が
あるのだ。

柿

子規先生は
柿が大好きであった

いつか
がぶりと
甘雨路のしたゝるのを
かまはづに
たべつゞけられた

ひとみが深い

ひるの星をみてゐるようであった

私はこの胸に
その音と
光りをもって居る。

熊笹が
日のくれの淋しさに
鳴りつゞける

どんぐりの實を
前掛で
ふいてゐる

すこし熟れたのは
錦き色。

彼の岸の
あい色は遠ほい
白く光って
暗くなる。

枳殼

きこくの實が

たまりに
落ちてゐる

たくさん
しづんだ 黄色

いばらの
向ふ

兵舎の
ラッパに

日がくれる

藏書閣

杏の花がゆれて
白日の夢に
散ってゐる

私の眸のなかに
透明なものが
浮きしづみする頃

風紋のある
白砂の上に
小蟻の整列

どこかの國の兵隊のやうに

二つの石の
きよらかな影に

粧ひを
そっとつんでゐる

はなよめは

水晶の光りを
足げにしてみる
小蝦だろう

やさしい絲光の瞳角
たくましいつやくした肌

ながいあいだの
蜜の鏡は
波紋にゆれる

私は思ふこころなく
何か上昇してゆくやうに
無花果のはかげに
うつ、なくあつた。

詩集かへり花

著作並印摺者
五百旗頭　欣一

發行者　畠山義郎
秋田縣北秋田郡下大里村

發行所　詩叢社
秋田縣北秋田郡下大里村
振替東京一八五五一二番

昭和十八年二月十一日印摺
昭和十八年二月二十日發行

頒價　貳圓